



国内でのイヌワシの正確な生息数は分かっていませんが、500～600羽程度とされています。国は種の保存法で保護対象種とし、さらに保護増殖事業計画対象種にも指定するなど、絶滅しないように取り組んでいます。しかし、繁殖成功率の低さもあり、イヌワシの未来は決して明るいものではありません。大森山動物園は、こうしたイヌワシのいのちをつないでいこうと、飼育と繁殖、展示でのイヌワシ理解にも努力を続けてきました。

今回は大森山動物園の新たな試みとして、さまざまな立場の人に動物園にお集まりいただき、イヌワシの未来を語り合っていました。環境省猛禽類保護センター、野生イヌワシを観察するカメラマン、生息地の森林を考える東北森林管理局の専門家、そして大森山動物園のスタッフも加わった総合的なものとなりました。聴衆100人程度の小さなシンポジウムでしたが、他機関と連携が始まる大森山動物園の新たな第一歩になるのかもしれない。

(シンポジウムコーディネーター 園長 小松 守)

シンポジウムは環境省東北地方環境事務所次長西村学氏のあいさつで始まり、4人のパネリストがそれぞれの分野から講演しました。

トップバッターは環境省猛禽類保護センターの内藤小容子自然保護官、長船裕紀自然保護専門員です。お二人からは猛禽類全般の体の特徴や生態系の地位、生息地と食性、狩りの仕方などの詳しいイヌワシの生態について、1年の生活サイクルを交えた説明がありました。この中では、イヌワシの繁殖成功率が徐々に下がってきていること、さらに東北のイヌワシについて見てみると、自然豊かな東北の森でさえも全国の成功率と比較して良くないことが分かりました。この要因として、工事等による環境破壊が考えられがちですが、逆に林業や牧畜業の不振で人の手が加わらないことにより、狩り場がなくなり、餌不足でヒナが育たない例や落石や暴風などにより巣が途中で落ちてしまうといった自然要因も示されました。イヌワシを守るために、法律を整備したり、保護増殖事業計画を立てるなど、国が行っている仕事についても紹介がありました。

次に、山形県内で野生のイヌワシを長年にわたり観察を続けている、山形北部稀少ワシタカ研究会会長今井正氏が撮影した野生イヌワシの貴重な映像が上映されました。映像と今井氏による解説は、今井氏のイヌワシに対する愛情が感じられ、大空を飛翔する姿や厳しい自然の中でたくましく暮らしている姿は、イヌワシの尊厳に触れられるような素晴らしいものでした。

続いて、大森山動物園からは、イヌワシ飼育の簡単な歴史や飼育下個体群の現状とその課題解決のための計画推進会議などについて、紹介しました。さらに、動物園が域外保全としてこれまで取り組んできた飼育や繁殖についての具体例、孵化したヒナを全て育てるためのローテーション育雛法、また有精卵や孵化数日のヒナを長距離移動して仮親に育てさせる取り組みなどを紹介しました。これらは野生下のイヌワシをバックアップするために必要な技術であることを訴えました。

最後に、東北森林管理局課長補佐庄司卓矢氏から、生物多様性の保全や地球温暖化防止、林産物の供給、水源のかん養、レクリエーション等、森林が持つ多面的な機能等について説明がありました。日本は世界有数の森林国で、世界平均を大きく上回り世界第3位の森林率を誇っていること、秋田県(国内14位)と山形県(国内16位)は世界第1位のフィンランド(72.9%)とほぼ同じ森林率(72%)であることが示されました。しかし、日本の木材自給率は28%しかなく、このままでは森林の多面的機能が低下するだけでなく、農山村地域の活力が低下してしまいます。これらを解決するためには間伐が必要で、土砂崩れ防止、二酸化炭素吸収率の維持、病害虫予防等の観点からも重要であることが分かりました。また、間伐はイヌワシの狩り場を確保する上でもとても重要であること、さらに、間伐もただ適当に間引くのではなく、列状に行うことがより効果的であるとの説明もありました。

基調講演の後は、活発な質疑応答となり、全てが終わった後、イヌワシの「風」とオモリン、わっしー君と参加者皆さんで記念写真を撮りました。

全体を通して、イヌワシとはどういう動物か、イヌワシを守るために様々な人たちがいること、イヌワシを守るとは豊かな森を守ることであり、さらには、適切に森林を管理することの重要性などが参加者に伝わったと思います。

動物園としては、これらのメッセージを来園者はじめ多くの人に伝え、野生動物を身近に感じ、自然との関わりについて思いをはせられるような工夫をしていきたいと感じました。

(飼育展示担当 主席主査 三浦 匡哉)



今井会長の講演



イヌワシの「風」



シンポジウムの様子



イヌワシ「風」とシンポジウム参加者

